

論文

高知県大豊方言における数量副詞語彙の体系

The system of the quantity adverbs in Otoyō dialect, Kochi

岩城 裕之 (高知大学教育学部)

IWAKI Hiroyuki

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

The following three aspects were revealed when we compared the vocabulary that expressed a large quantity and that which expressed a small quantity in Otoyō dialect, KOCHI:

- 1) We found that there were more words for expressing a large quantity than those for expressing a small quantity.
- 2) The words for expressing a large quantity have been systemized into two types-- one for the quantitative aspect and the other, for the qualitative aspect. The words for expressing a small quantity on the one hand, have been systemized for the exclusive use in expressing the quantitative aspect.
- 3) Considering these aspects together, we are led to believe that the local people have perceived large quantities in many ways and have expressed them accordingly.

When compared in Otoyō dialect and Kisa dialect (HIROSHIMA), these aspects were the same.

I. はじめに

方言程度副詞語彙や数量副詞語彙の記述研究は、全国一律に進んでいるわけではない。これまで中国地方、九州地方には多い（注1）ものの、四国方言については未開拓の部分が多い。

しかし多くの地域において、程度副詞や数量副詞はしばしばその土地の代表的な方言としてあげられる。例えば高知県観光情報サイト『こじゃんとネット』があるように、高知方言では「こじゃんと」がそのひとつである。したがって、程度副詞語彙や数量副詞語彙の記述研究が地域的に偏っていることは、決してその土地の方言に特徴的な副詞がないことを意味しているわけではなく、研究者のフィールドがたまたま偏っていたということであろう。

そこで、高知県北部方言を取り上げ、数量副詞語彙の体系を概観する。また、四国方言の数量副詞語彙の記述と分析の視点と課題について考えたい。

II. 調査の概要

1 調査地点および教示者



調査地点は高知県長岡郡大豊町である。2015年の統計によると、人口は約4000人、高齢化率は高知県内では最高の約56%である。高知県北部にあり、徳島県と愛媛県の県境に位置する。高知と徳島・愛媛を結ぶ交通の要衝であるが、吉野川とその支流が町内を流れ、大半が急傾斜の山岳地帯である。2つの県に接するため、愛媛、徳島それぞれの影響を受けるとされる町内2つの地点を調査地点とした。

調査地点1

立川（たちかわ） かつては土佐北街道の高知県側最後の集落である。現在は県道が通っており、笹ヶ峰トンネルを経て愛媛県四国中央市新宮町へ抜けることができる。和紙の原料であるミツマタの栽培や昭和30年代には焼き畑など、畑作を中心とした農業集落である。

教示者は昭和6年生まれの男性、調査年月日は2015年1月21日である。

調査地点2

豊永（とよなが） JR土讃線と国道32号線が貫く。最寄り駅は豊永駅。徳島県三好市へ抜けることができる。さらに京柱峠を経て徳島県三好郡東祖谷山村へ抜ける国道439号線も分岐する。吉野川とその支流に沿って広がった集落で、傾斜地での畑作が主な産業である。教示者は昭和9年生まれの女性、調査年月日は2015年1月16日である。

2 調査方法

数量副詞と程度副詞を併せて調査した。数量が「多いこと」「少ないこと」、割合が「全部」「大きいこと」「ちょうどであったこと」、程度が「大きいこと」「小さいこと」という枠組みを示し、これらを表す語にどのようなものがあるかを思い出し、教示してもらった。なお、あげられた語について、その語の意味や新古、共通語意識などについて筆者が確認を行った。

本論文では、数量が「多いこと」「少ないこと」で得られた語についてのみ考察を行う。また、「いくらでも」のように限界性のない多量を表す語も今回の考察に加えなかった。

III. 大豊方言の数量副詞一覧

それぞれのカテゴリーで得られた語と、その説明、使用文や教示文を示す。なお、話者の話した教示文や使用文例は、○のあとにカタカナで表記し、（ ）に共通語訳を付した。筆者が補足した事項は{ }で示した。なお、アクセントは表記していない。●のあとには話者の説明をまとめたものを共通語で示した。【 】には文例を得られた地点を示し、【立】は立川、【永】は豊永である。また一つ一つの語の意味について、筆者が確認した事柄について、適宜解説を加えた。

A 数量が多いことをあらわす語

①ドッサリ

頻繁に使用され、両地点で第一回答であった。オノマトペ出自だと思われるが、現代の共通語オノマトペが持つ「重い様子」にとどまらず、用法も様々である。

○サンサイガ ドッサリ デタ。(山菜がたくさん生えた)

【永】

○ドッサリ トレタ ネー。【永】

○ショー ドッサリ アル ヨ。(とてもたくさんあるよ)

【立】

物以外の量、例えば生物（特に人）の量であっても同様に使用される。

○{人が}ドッサリ キトツタ。(たくさん来ていた)【永】

○{人が} ショー ドッサリ キタドヤ。(とてもたくさん来たよ)【立】

さらに、川の水量であっても使用できる。

○ドッサリ ナガレヨッタ。(たくさん流れていた)【永】

以上は数量の用法であったが、程度の場合にも使用される。

○ドッサリ ハヤツル。(よく流行っている)【永】

『高知県方言辞典』にも「どっさり」系の語は複数掲載される。「どっさり」は「どっさり。たくさん」のように訳語として掲載されるのみだが、「とっしら」「どっしら」「とっしり」「どっしり」が見出しとして掲載されていた。したがって「どっしり」系の語は数量が多いことを表す副詞としてかなり一般的であると考えられる。

ただ、今回の調査では、「とっしら」「どっしら」「とっしり」「どっしり」の4語を聞くことはできなかった。

②ヨケ ③ヨケー

「ドッサリ」同様、さまざまな対象物の分量について使うことができる。例えば、以下のような文例が聞かれた。

○{人が} ヨケー カエラダツカラ ネー。(たくさん帰らなかったからね)【永】

○ヨケー ミカンガ ナツタ。(たくさんみかんがなった)【永】

○{作物が} ショー ヨケ トレタ。(とてもたくさんとれた)【立】

④ヨーケ

②「ヨケ」とは長音の位置が異なる類似語形であるが、立川では「チョット ニュアンスガ チガイマス ネ。

(少しニュアンスが異なりますね)」と教示を受けた。具体的には、「ヨケ」よりも「ヨーケ」のほうが分量が多いように感じるということであった。

『高知県方言辞典』には県内広く使われている語として掲載されるが、今回の調査で豊永では聞かれなかった。今後の確認が必要である。

⑤タクサン

○センゴノ ショクリョーナンノ トキワ タクサン アワ ヒエ ウエマシタ ネー。(戦後の食糧難の時はたくさん粟や稗を植えましたね)【立】

○ミツマタガ タクサン トレマシタ ヨ。(みつまたがたくさんとれましたよ。)【立】

①「ドッサリ」のように広く使えるが、共通語の認識が高い。

⑥イッパイ

○ショー イッパイ アル。(とてもたくさんある)【立】

○イッパイ ナツトル。(みかんがたくさんなっている)【立】

⑤「タクサン」同様広く使え、共通語の認識が高い語である。ただし、⑦「ヤマモリ」が山のように盛ってあるという比況性を持つ一方、「イッパイ」は容器に満杯である程度の量を表す。この点で、対象物が固体物の場合、図1のような違いが生まれる。

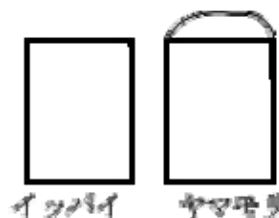


図1 立川教示者によるイメージ

⑦ヤマモリ

語形からは「山のように盛る」ということがわかる。①「ドッサリ」から⑥「イッパイ」までの語が、様々な対象物の分量について使える点とは異なっている。

○オケニ ヤマモリバー トレタ。(桶に「やまもりほど」とれた)【立】

○ヤマモリ アツトラ ドッサリ オモカロー。(たくさんあったら、ずっしりと重いだらう)【永】

○ヤマモリ イレートーセ ヤ。(たくさん入れてよ)【立】

●水の時と言わない【立】

という教示が得られたが、「山のように盛っている」という比況性からくる制限であると考えられる。

⑧タラフク

共通語意識の高い語であるが、飲食物の分量について使用する。

⑨ナノカブンバ

⑧「タラフク」に関連して豊永で聞かれたのが「ナノカブンバ」である。

○ナノカブンバ タベテキタ。(腹一杯食べてきた)【永】

豊永の教示者によると、嫁が実家に帰っておなかいっぱい食べてくるという様子を「サトバラ ナヌカ(里腹七日)」という表現があるという。これがもとになって生まれた数量副詞であると考えられる。

⑩タップリ

○タップリ イレートーセ。(十分入れてください)【立】

○タップリ タベタ。(十分食べた)【立】

●タップリ トレタとは言わない【立】

このほか、「エツト」「ギョーサン」はいずれも豊永で聞いたことはあると回答された。うち「エツト」は徳島の人が使うという教示を得た。

高知のことばとして認識されておらず、今回の考察の対象からは外す。

イ 数量が少ないことをあらわす語

①チョット

○チョット チョーダイ。(少してください)【立】

分量にも使うが、程度でも使える。

○モ チョット ヒダリヨリ ヤ。(もう少し左寄りだ)

【立】

時間についても同様である。

○チョット マッテ ヤ。(少し待ってよ)【立】

このように、分量としても程度としても使用できる。

②チット

○チットシカ ナイ。(少ししかない)【永】

○モー チット アリヤー ワケテヤルノニ ネ。(もう少しあったらわけてあげるのにな)【永】

以下のように、程度にも使用することができる。

○チッター エー ヨーナ ネー。(少しは良いようだね)

【永】

「チョット」とほぼ同じであるが、立川と豊永で語形が異なるようである。大豊町内の分布の詳細は今後の課題としたい。

③スコシ

共通語として認識されている語である。「チョット」と同じように使用できる。

○{「スコシ」は} ヒョージュンゴ。(標準語{だ})【立】

○スコシ チョーダイ。(少してください)【立】

④チビット

①「チョット」から③「スコシ」までの語よりもさらに少量の場合に使用する。

○ユビサキデ チョット ツマンダグライ。(指先で少しつまんだくらい)【永】

立川でも使用するが、使用頻度は小さいという教示を得た。

⑤メクソバー

○メクソバー クレーデモ モット ヨケー クレ。(少しでもくれなくても{いいだろう}、もっとたくさんくれ)

【永】

○メクソバーノ モノ ヨ。(ほんの少しのものよ)【立】

目やにほどの分量ということであり、「チョット」より

もさらに少量を意味する。

○ホンノ スコシ トレタ トキ。キョクタンナ オーゲサニ モノー ユー トキニ ネ{使う}。(ほんの少しとれたとき。極端に大きさにものを言うときにね{使う})

【立】

⑥チョッピリ

○チョッピリ シオー タシタラ オイシーロー。(少し塩を足したらおいしいだろう)【永】

○チョッピリワ シオ ヨネ。(チョッピリ{を使う}は塩{の量}よね)【永】

これらの例からわかるように、ごく少量の場合に使用する。塩は調味料としてそれほど多い量を使用しないことから、教示者は塩の文例をあげた。

立川でも同様である。次のような教示を得た。

○チョットヨリ モー スコシ スクナイ リョージャナイデショー カネ。「チョット」よりも少し少ない量ではないでしょうかね)【立】

⑦チョビット

○{チョッピリと}ダイタイ ニタヨーナ ツカイカタデス ネ。(大体同じような使い方ですね)【立】

●{「チョッコリ」に似ているが}物の量としては「チョビット」。(「ちょびっと待って」のように、時間関係には使用できないということ)【立】

この語もまた、より少ない分量を表す語である。

IV. 大豊方言の数量副詞語彙の体系

—吉舎方言との比較を通して—

1 語数の比較

語数を比較すると、数量が多いことを表す語が10語に対して、数量が少ないことを表す語は7語であった。

この傾向を、中国方言に属する広島県三次市吉舎方言と比較しながら分析する。なお、吉舎方言を選択した理由は3点ある。大豊町に比べると山地は深くはないものの内陸部にあること。次に、吉舎方言は中国方言の安芸・備後方言の接境域にあり、大豊方言とは異なる方言域であるため、地域性を超えた傾向を見いだせること。最後に調査年次が近いことの3点である。以上の理由から大豊方言と吉舎方言を比較すると、表1のようになる。

	数量<多>	数量<少>
大豊方言(高知)	10	7
吉舎方言(広島)	10	6

表1 語数比較(大豊・吉舎)

両地点とも数量が多いことをあらわす副詞の語数が多い。

比率で考えると、数量〈多〉と〈少〉の語数の割合は大豊方言のほうがわずかに近接しているものの、数量副詞語彙では数量が多いことを表す方向に語数が多いことが指摘できる。

2 意味構造の比較

ア 数量が多いことを表す語

大豊方言で数量が多いことを表す語は10語であった。うち、5語は対象物に制限なく使える語である。一方、⑦「ヤマモリ」は対象物が個体物に限られ、⑧「タラフク」⑨「ナノカブンバ」の2語は対象物が飲食物である、対象物制限のある語である。さらに⑩「タップリ」は単に数量が多いことを表すというよりも、十分であるという意味を持っている、文脈制限のある語であった。

また、「ヨーケ」1語は、少し多量を表している語であり、多量であることが2段階でとらえられている。

以上をまとめると、次のようになる。

意義素として「多量」「より多量」、「飲食物の分量を示す」「個体物（積み上げるもの）の分量を示す」「十分であるという文脈制限」を設定できる。すなわち、数量が多いことを表す語は、「より多い」のか「多い」のかという量的側面に加え、特定文脈でしか用いられない質的側面の二種によって体系化される。

これらを表にし、語数を示した。表2として示す。

	より多量	多量			
		制限なし	対象物制限		文脈制限
			個体物	飲食物	
大豊方言	1	5	1	2	1
吉舎方言	2	6	1	1	0

表2 数量が多いことを表す語

大豊方言、吉舎方言ともに、個体物と飲食物の分量について言及する語がある。飲食場面で腹一杯食べること、収穫物などが山積みになっている場面の2つは、地域社会の人々にとって特別なできごとであり、言語化する必要があったものと思われる。

また、文脈制限のある語が大豊方言特有の意義素としてあげられる。しかし、「たっぷり」という語は吉舎では聞かれなかったものの、多くの地点で聞くことができる語である。したがって、大豊方言で聞かれることは特

別なことではないと考える。

イ 数量が少ないことを表す語

意義素として設定できるのは分量について言及するものだけである。

①「チョット」から③「スコシ」までの3語は少量を表す語であるが、④「チビット」から⑦「チョビット」の4語はさらに小さい量を表す。

意義素と語数を整理したものが表3である。

	少量	より少量
大豊方言	3	4
吉舎方言	3	3

表3 数量が少ないことを表す語

「少量」とそれを強調した「より少量」の意義素に、ほぼ同数の語が所属する。数量が多いことを表す語彙が数量だけでなく、対象物や文脈という意義素がみられたことと対照的である。

3 まとめ

以下のことが明らかになった。

- ①数量が多いことを表す語は、数量が少ないことを表す語よりも多い。
- ②数量が多いことを表す語は、量的側面に加え、質的側面の二種によって体系化される。
- ③一方、数量が少ないことを表す語は、量的側面のみであった。それも、より少ない方向の語数が多かった。
- ④以上を併せて考えると、数量が多いことは、土地の人々によって多様に捉えられ、表現されているといえる。
- ⑤数量が少ないことに対する関心は「分量」に、数量が多いことに対する関心は「場面」にあると考えられる。
- ⑥この傾向は、大豊方言と吉舎方言で大きくは変わらない。ある程度一般的な傾向であるかどうか、今後の調査が必要である。

V. まとめ

1 結果

大豊方言の数量副詞語彙について概観した。

語数では、数量が少ないことを表す語に比べ、多いことを表す語のほうが多い結果となった。また、数量が少ないことと、より少ない分量を表す語はほぼ同じ語数であった。すなわち、数量のとらえ方について、「多」

「少」「より少」の三段階が主となっているといえる。

反面、数量が多いことを表す語彙には、質的側面に関する意義素が得られた。具体的には「飲食物」「個体物（積み上げられるもの）」であり、これらには専用の語が準備されていた。飲食場面や収穫などの場面が、地域社会において特別な意味を持つことを意味していると考えられる。また、満足度が多いこと、つまり「十分である」という文脈で使うことができる語が準備されていることにも、地域人の発想がうかがえる。

簡単にまとめるならば、「数量が多いことにはその内容が問われ、数量が少ないことにはその分量が問われている」ということであろう。

なおこの傾向は、広島県吉舎方言と大きく異なるものではなかった。

2 今後の課題

まず、大豊方言の数量副詞語彙について、町内の分布状況を詳細に確認することが求められる。今回の調査で立川と豊永で差が見られたが、これが地域差によるものであるのかを確認するとともに、愛媛、徳島の両県との関係において位置づけることが必要であろう。ただし、特に立川集落は人口がわずかであり、すでに遅きに失した感もある。早い対応が求められよう。

同時に、四国方言全体の数量副詞語彙の記述が求められる。

次に、これらの記述と分析を通して、そこにみられる一般的傾向と地域性を明らかにする必要がある。今回、数量が多いことと少ないことを表す語彙に非対称性が見られ、広島県吉舎方言と共通している傾向にあったが、これがどの程度一般化できる傾向であるのかを明らかにする必要がある。

3 個別語の記述

最後に、「ヤマモリ」「ドッサリ」について触れておく。

数量副詞として「ヤマモリ」があがったが、この語は現代共通語では名詞もしくは形容動詞として扱われる。下の例では、「山盛りの」は名詞「水瓜」を修飾し、「山盛りに」は「に」を伴うことで動詞「して（する）」を修飾する。後者の場合は形容動詞連用形と考えることができる。

御夏さん呼んで静岡に水瓜はあるまいかと聞くと、御夏さんが、なんぼ静岡だって水瓜くらいはありますよと、御盆に水瓜を山盛りにして持ってくる。そこで老梅君食ったそうだ。山盛りの水瓜をことごとく平らげて、御夏さんの返事を待っていると、返事の来ないうちに腹

が痛み出してね、

夏目漱石『吾輩は猫である』より。下線部は筆者

しかし、大豊方言の「ヤマモリ」は「に」を伴わず、直接動詞に接続し、動詞を修飾していた。

○ヤマモリ アッタラ ドッサリ オモカロー。

○ヤマモリ イレトーセ ヤ。

語形は共通語と同じであるが、この場合は副詞として働いている点で特徴的である。(注2)

また「ドッサリ」については、「(重くて手ごたえのある意から)数量の多いさま、たくさんあるさまを表わす語。どっしり」(『日本国語大辞典 第二版』による)とされるが、大豊方言の「ドッサリ」はこれよりも自由な用法を持つ。すなわち、

○ドッサリ ハヤットル。(よく流行している)

○ドッサリ オモカロー。(ずっしりと重いだろう)のような数量に関わらない程度副詞としても使用される。

『高知県方言辞典』にも「ドッサリ」系の副詞が記載されており、「ドッサリ」の高知県方言と共通語とのずれもまた興味深いテーマである。

このような各々の語の記述と分析も今後の課題である。

注1 まとまった報告、研究として、『内海文化研究紀要第4号—瀬戸内海域方言の副詞語彙の研究』は瀬戸内、『方言副詞語彙の基礎的研究』は中国地方である。また、井上博文(1989)「大分県臼杵市方言における数量関係の副詞語彙の地域性：肥筑方言・瀬戸内海域方言との比較を中心として」、『佐賀大國文』17、井上博文(1987)「熊本県下益城郡砥用町方言の程度副詞語彙の構造・数量関係の副詞語彙を中心にして」、『国文学攷』113など、井上博文は九州方言において精力的に数量副詞語彙を調査、論文化している。このように、主に西日本、それも中国四国地方に偏っている。

注2 もっとも、同様の用法は坂口安吾の作品には時々見られる。

「悪侍を退散させてから居候になるつもりだから、毎日うまい物を山盛りくわせるのを忘れるな」坂口安吾『曾我の暴れん坊』

「女中は嘲笑して去ったが、卓上には置き場がないほどの大きな皿にパイを山盛り運んできた。」坂口安吾『決戦川中島 上杉謙信の巻』

会話文にも地の文にも出現することから、特別な人物に関わって使われるということではなさそうである。また、坂口は新潟県出身であり、「山盛り」が副詞として使われることが直ちに高知方言独特の用法であるとは結論づけることはできない。さらに「薬味のわけぎを小さく刻んで、山盛り皿に入れて出しておいて、戸口に椅子を持ち出し、だしの煮こぼれるまで、由は此椅子に呆んやりかけてゐるのです。」という林芙美子『小さい花』の用例も、副詞としての用例である。ただし、坂口安吾も含め、いずれの作家も副詞として使用しない例のほうが多く、安定して副詞として使用される大豊方言とは様相が異なる。

文献

- 1 岩城裕之（2009）『方言数量副詞語彙の個人性と社会性』和泉書院
- 2 岩城裕之（2016）「広島県三次市吉舎方言における数量副詞語彙の体系と動態」『高知大学教育学部研究報告 第76号』
- 3 土居重俊・浜田数義編（1985）『高知県方言辞典』高知市文化振興事業団
- 4 広島大学内海文化研究室（1976）『内海文化研究紀要第4号—瀬戸内海域方言の副詞語彙の研究』
- 5 室山敏昭（1976）『方言副詞語彙の基礎的研究』たたら書房

また、作家の用例は青空文庫の電子データによった。